

訳註 如浄禅師語録

小川 弘貫

如浄和尚建康府の清涼寺に住する語録卷上

侍者 文素

- 一(嘉定三年)一一一〇年
- 二(程途)修行の階位
- 三(乾坤洞徹)開く時の境地。主観を客観で表わす
- 四(左辺に拍し……)大用、善巧方便
- 五(関根)かんぬき、大事なところ
- 六(風雷を)いろいろな働きを
- 七(毒刺)法見、法縛
- 八(達磨の眼睛)中国禅の中心神髓
- 九(人を打す)学人を作る。これをなすのが方丈である
- 一〇(看よ海枯れて……)迷いがなくなつた世界
- 一一(波浪天を拍して……)前句のいいかえ
- 一二(至治)天下がよく治つている
- 一三(寥寥たり)静か
- 一四(号令を)教えを
- 一五(霆)稲妻
- 一六(綱宗を振わしむ)号令以下は修行活動を表わしている
- 一七(切に忌む……)耳をそばだてねば教えはわからない。それを聞くなという。逆の教え
- 一八(請疏)拝請の疏
- 一九(夫子)孔子
- 二〇(両彩一賽)二つが同じであるといふこと
- 二一(玉振金声)疏とはこのようなもの
- 二二(千変万化)説法
- 二三(功無くして……)この反対が「大功不賞」
- 二四(露柱)本堂の柱
- 二五(忽然として……)宗教的ひらめきが突然出てくる。全生命的爆發
- 二六(無孔の鉄槌を……)努力してみるのが百不当失敗する
- 二七(金粟大士)根本的には自分
- 二八(親しく毛錐子の上より……)説法する

師嘉定三年十月初五日に於て、華藏褒忠禅寺に於て、請を受けて入寺す。山門を指して、程途を截断して驀直に來たる。乾坤洞徹して此の門を開く。左辺に拍し兮、右辺に吹く。関根を倒翻して風雷を起す。

仏殿を指して、殿を開けて仏を見るは眼中的毒刺、咄。刺を抜却す。礼拝焼香は顛倒鈍置。方丈に踞り、達磨の眼睛を抉出して泥彈子と作して人を打す。高声に云く、看よ海枯れて底に徹過す。波浪天を拍して高し。

師法座の前に至つて帖を拈じて、筆頭禿尽して一毫を通ず。至治寥寥たり静極の中、帖を拳して云く、看よ風雲を点起して号令を伝え、雷霆墨を潑いで綱宗を振わしむ。共に相い証拠する底有ること莫しや。切に忌む耳を側つることを。

請疏を拈じて、瞿曇の頂骨、夫子の眼睛、両彩一賽、玉振金声。

法座を指して、大地平沈此座高広、千變万化、功無くして賞を受く。

衣を歛めて座に就く。乃ち云く。露柱懷胎して忽然として爆裂す。無孔の鉄槌を突出

して歷劫都盧敗缺す。直に得たり、金粟大士玉麟堂に陞つて、親しく毛錐子の上より一陣の業

元(水牯牛)修行者
三(徹顛徹狂)修行者の動きのようす
三(東撐西拄)一つのものにおさまることばむづかしい
三(大平の水草を……)宗教生活のようす
三(蒺藜)ひし
三(臨済の命根を……)絶対の境地、大死一番する
三(者の畜生……)自分をほめていう
三(閻浮)この世の中
三(人を笑殺す)仏見、仏縛を去つて何もないところ
三(功)仏教の栄えた大功
三(皇聖化の中にあり)皇室へのあいさつ、英明な天子のよく治めた代
三(三聖)臨済の嗣
三(験尽)読むもの見るものすべて自分ためすもの
三(尚書)事務をする人
三(叢林の為に……)宗教活動をする
三(榜)札
三(機先向上の機)第一義諦
三(毒蛇の……、黒牛の……)首座のすぐれたところを示す
三(巴)うずまき
三(甚だ悪毒……)よい意味
三(咒眼を將つて観んと……)第一義諦はあとかたない悟迹を残さない
三(第一頭)首座
三(元宵)正月十五夜
三(乾紙燃)こより
三(賊賊)盗んでかくしてあるもの
三(処典)よりどころ
三(点破)しらべる
三(歴劫分たず)過現未を分たず
三(一線を通ず)元宵であるから
三(諸方の道旧至る上堂)道旧をほめたたえる上堂
三(大家顛倒して……)臨済の禍胎の説明

風を吹く。其れをして変じて水牯牛と作して、徹顛徹狂せしめ、東撐西拄南倒北播す。未だ免れず大平の水草を犯し、清涼の田地を破つて深く荊棘を栽えて蒺藜を布き此れを以つて臨済の命根を断じ、此れを以つて衲僧の眼目を瞎す。手を以つて膝を拍して云く、叱叱、者の畜生、驢馬相勾引して閻浮を悩乱して人を笑殺す。然かも与麼なりと雖も畢竟功何の処にか帰す。総べて吾が皇聖化の中に在り。

復挙す。三聖道く、人に逢つて則ち出でん。出でては則ち人の為にせず。興化道く、我人に逢つて則ち出でず。出でては則ち人の為にせん。此の両則の公案、衲僧を験尽して為に眼を

着け難し。忽ち我が大檀越建康府主、等閑に覷破して清涼に拳似せらる。謂つべし、龍吟ずれば雲起こり、虎嘯けば風生ずと。未だ免がれず、尚書の鼻孔を借りて叢林の為に氣を出だし、箇の口号有り、諸人に拳似することを。一挙首として登る龍虎の榜、太平親しく到る鳳凰池、全生全殺言象を超ゆ、透る機先向上の機。

首座を請する上堂。毒蛇の尾巴を抜断し、黒牛の鼻孔に穿住す、虚空背上に牽き来たれば、大地六番震動す。甚だ悪毒兮、甚だ仇讐、屎尿腥臊汗血流る。眼を將つて観んと擬すれば跼跡無し、箇れは是れ清涼の第一頭。喝一喝。

元宵上堂。過去の然燈仏、相い牽きて業識を弄す。現在の漏燈盞、光影人眼を瞞ず。未来の乾紙燃、賊賊処典無し。咄。髑髏前に点破し、鼻孔裡に看見す。衲僧門下黒漫漫、歴劫分たず一線を通ず。

諸方の道旧至る上堂。大道無門、諸方の頂顛上に跳出し、虚空路を絶す。清涼が鼻孔裡に入り来たる。恁麼の相見、瞿曇の賊種、臨済の禍胎なり咦。大家顛倒して春風に舞い、杏花を驚落して乱紅を飛ばす。

△(喧)あたたか

△(哆哆和和)小供のことは

△(主賓妙に叶う)根本はかなう

△(跛跛挈挈)根本ははつきりしない

△(偏正全く該ぬ)円満

△(威音以前の一句)対を絶したところの一句

△(鬱々葱々)あおあおとしげる

△(世上の老人、天上の星)寿命を延長した人

△(蟠桃の仙花)長寿の桃

△(林下の衲僧……)宗意、宗旨をあらわす

△(手中千古の一枝の藤)永遠の生命

△(三分の光陰……)境界を詩に託してうたう

△(靈台一点も……)無我の状態

△(綱宗の眼目)禪宗の僧としての一句

△(啞……)誘発された宗教的感動

△(瞿曇出世せず……)根本的言い方

△(惡水を甘茶を……)諷りに掩彩を將つて花祭りの花見堂の飾り

△(大早)よく晴れた

△(空索索)静かでさびしいさま

△(乾剝剝)木の葉が落ちて枯れる

△(滂沱として大いに霑ぐ)乾いた中で潤う。表と裏

△(六年落草す野狐精)苦しまれた迷いの状態をさす、野狐精には文字通りの意と才能のすぐれた者の意とある

△(渾身是れ葛藤より跳出)さとられたところ

△(眼晴を打出して……)究極のところでは目も耳も無い

△(人を誑かして)ほんとうはことばでは言えない

△(知恩報恩)仏恩を

△(他を鈍置す)無用のものとして

縁西堂を謝する上堂。梅花清曉に香し、爛熳として功を借る。柳線早春に濃なり、日喧にし

て位を転ず。那邊に去るに非ず者裡より来る。哆哆和和兮。主賓妙に叶う。跛跛挈挈兮。偏正

全く該ぬ。直に得たり、泥人袖を舞わし、石女笙を吹くことを。自然に清白伝家猶お是れ児孫

辺の事なり。且く道え、威音已前の一句、又作麼生、千光照らさず空王殿、夜半烏鷄雪を帯び

て飛ぶ。

陳宣義が生日陞堂。春風軽く春日晴る、柳眼青く黄鶯鳴く、鬱鬱葱葱として瑞氣を生ず、世

上の老人天上の星。恁麼に見得せば、釈迦讚歎し、弥勒証明せん。蟠桃の仙果を笑中に呈す。

然りと雖も且く道え、林下の衲僧何を將つてか酬献せん。手中千古の一枝の藤。

上堂。三分の光陰二つ早く過ぐ、遅日江山麗しし。靈台一点も揩磨せず、春風花草香し。

生を貪り日を逐つて区区として去る、泥融して燕子飛ぶ。喚べども頭を回さずいかんせん、沙

暖かにして鴛鴦睡る。大衆、清涼頌に夾んで詩を念ず、還つて綱宗の眼目有りや。啞、杜鵑啼

き徹せず、血流れて山竹裂く。

四月八日上堂。雲開けて山岳露わる、雨過ぎて色新鮮なり、瞿曇出世せず、敗闕す未生の前

き。天上天下賊は是れ小人。三拝起き来つて惡水を洗ぐ。諷りに掩彩を將つて慇懃に当つ。

秋早上堂。一葉落ちて空索索、天下の秋、乾剝剝。大衆若し還つて者裡に坐在せば、総に是

れ渴死底の漢、且く作麼生か条活路を討ん。清涼箇の方便有り、拄杖を卓すこと一下して、霹

靂一声滂沱として大いに霑ぐ。笑い見る烏藤の倒に樹に上ることを。

臘八上堂。六年落草す野狐精、渾身是れ葛藤より跳出。眼晴を打失して覓むるに処無し。

人を誑かして剛て道う、明星を悟ると。清涼恁麼の讚歎、恩を知つて恩を報ずと作す。其れ或

は然らずんば、年年臘八一瓊の茶。札拝焼香他を鈍置す。

六(塵塵刹刹轉た風流)見る者の心で見られる者もそのようになる

六(獨體前、腦蓋後)時間的には、過去から未来にかけての一貫した考え

六(一点洞明)我々の中にあつて光つてゐるもの、意路を超えたもの

六(然燈古仏転た……)然燈仏がことばで説くならば

六(諸説)ことばにつしみがなく、あやまりがある

六(無面目の漢)面目全く該ぬ根本的には無面目、その上に次下のよ

六(日は烘る……)二月頃の大地自然の様子とその点景

六(筋斗を翻す)かなづちがひっくりかえる。さとりを表わしたことは

六(万像平沈して大地空す)亡れたところを客観的に言う

六(贏得)あましえる、結局のところこれだけを得た

六(王頑石)人名

九(白圭)玉

一〇〇(站無き)立派な人格

一〇一(點頭)うなづく

一〇二(転関の一擲)意路不到、言語道断のところ

一〇三(仏祖の仇讐)もし言葉があれば仏祖の仇讐となる

一〇四(猪狗を咬む……)大用の方面

一〇五(忽然として……)究極のところ

一〇六(齒門の缺くることを)不能説、何とも言いようがない

一〇七(露れず)あらわれない方が尊い

一〇八(雪夜の……)縁西堂のはたらき

正旦上堂。今朝正月初一。一挙すれば上上大吉なり。吉にして利ならずということ無し。春

風和気なり、散じて花梢に入る。百草頭、塵塵刹刹轉た風流。

元宵上堂。獨體前、腦蓋後、一点洞明光影裡に走る。畢竟如何、咄。然燈古仏転た諸説。

二月一日上堂。大衆、無面目の漢、面目全く該ぬ。日は烘る楊柳の眼、煙は抹す杏花の腮。

其れ或は然らずんば、黄鶯啼き尽さず、特地枝を下り来る。

涅槃上堂。瞿曇夜半筋斗を翻す、万像平沈して大地空す。贏得たり波旬手を拍して笑うこと

を。燈籠露柱暗に胸を槌つ。清涼當時若し見ば、亦た乃ち手を拍して大笑せん。何が故ぞ、理

長ずれば則ち就く、既に今日に到る。又作麼生。限り無き山花と流水と幾多の啼鳥春風を共に

す。

四月八日上堂。龍、龍を生じ、鳳、鳳を生ず、天を指し、地を指して、独り尊と称す。老鼠

児を養つて屋棟を巡る。大衆勘破し了るや。共に惡水を將つて驀頭に洗ぐ。万面の黄金もまた

消すべし。

玉頑石報恩に住する陞座。白圭珍無きに、頑石點頭す。転関の一擲、仏祖の仇讐、咦、猪狗

を咬む漢轉た風流。

中秋上堂。雲秋空に散じて即心月を見る。払子を挙して云く、看よ家家の門前明月照らし、

処処の行人明月を共にす。鯨に騎つて月を捉え、船を撐して月を載す。忽然として月落ちて夜

沈沈、笑殺す胡僧齒門の缺くることを。

縁西堂を請じて再び首座に充つる上堂。堂に當つて露れず。主人翁元と是れ旧時、影を借り

て全く彰る第一座、屈して今日に煩わす。雪夜の金烏堂を歴、炎天玉兔懷に転ず、妙に児孫に

叶つて全く祖父を該ぬ。木人板を執つて雲中に拍し、石女笙を含んで水底に吹く。然も是の如

二四 陋巷には騎らず……西堂の人格を表わしている
 二五 破欄衫(生活面ではやぶれ衣をつけている)
 二六 清涼の……清涼寺の気分
 二七 回互を没す(相對を絶す、般若の境界)
 二八 裡許に(その中に)
 二九 挨(おす、おしひらく)
 三〇 拶(ひく、挨と拶とで修行のようすを表わしている)
 三一 放行(つきはなす)
 三二 把住(つかまえる、放行、把住は修行をさせる師家のようす)
 三三 総に是れ……(否定しながらみとめるている)
 三四 冤家(よけいなこと)
 三五 點頭(みとめている)
 三六 針眼(真中のところ)
 三七 短長(短長に断じ)短長、相對を断ず
 三八 巧みに鴛鴦を誘出す(春になることを表わしている)
 三九 不見(第一義のところ、見は第一義)
 四〇 斬新の……(不見の上で世界がひらけてくる)
 四一 天地一指……(すべてはひとつ)
 四二 一も亦放下(一にもとらわれな
 い)
 四三 大海波心軽く律動すれば(一つのよろこびが他に及ぶ)
 四四 寶(炉の火)
 四五 主(自分)
 四六 勘破(採点する)
 四七 暖処に帰せんとすれば(炉にと
 られると)
 四八 瞿曇(瞿曇眼睛を打外する時)通達位
 四九 雪裡の梅花(一枝)さとりによ
 けて開けた妙有の世界
 五〇 荊棘となる(その世界がひろが
 っていくと、荊棘となる)

くなりとも、且く道え、手を那辺に垂るる一句又作麼生。陋巷には騎らず金色の馬、回途却て破欄衫を着く。

知事を請ずる上堂。清涼の大火聚、炎炎として回互を没し、衲僧の赤骨律、通身是れ劍樹。裡許に在って相い挨し、厮い拶す。裡許に在って放行し、把住す。放行把住風流を逞す。総に是れ冤家笑つて點頭す。

冬至上堂。昨日一線短く、今朝一線長し。針眼裡より過ぎ、尺寸上に量る。短長(短長)割に断じて巧みに鴛鴦を誘出す。私子を挙して云く、看よ、還つて見るや、我見人見、衆生見寿者見。咄。都べて不見最も親見。斬新の慶賀、千化万変。

十月朔一、書記至る上堂。天地一指、万物一馬。二は一に由つて有り、一も亦放下。私子を撃つこと一下して云く、然して後者裡に向つて拈起す。之を衲僧の火柴頭と謂う。大海波心軽く律動すれば、須弥頂上に汗通流す。今朝此を以つて開炉す。無賓主の話、趙州を勘破す。然りと雖も暖処に帰せんとすれば、箭髑髏を過ぐ。

臘八上堂。瞿曇眼睛を打失する時、雪裡の梅花只一枝。而今到处荊棘と成る。却つて笑う、春風の繚乱として吹くことを。諸方は禅を説き、清涼は詩を念ず。還つて当り得んや。其れ如し然らずんば、香を焼き、燭を点じて、泥団を拝す。脳後遼天鷄子飛ぶ。

晴を祈る上堂。一滴息まず、兩滴三滴、滴滴、瀝瀝、連朝夕に至る。変じて滂沱と作していかんともすること勿し。山河大地風波を袞ず。噴嚏を打すること一下して云く。総に衲僧の噴嚏一激を出でずして、直に得たり雲開けて日出づることを。私子を挙して云く。大衆者裡に向つて看よ、朗朗たる晴天八極を呑む。若し還た旧に依つて水漉漉たらば、渾家羅刹国に飄墮せん。稽首す釈迦、南無弥勒、能救世間苦、觀音妙智力。咄。

- 一四(泥団)仏像、紙、木泥を仏たらしめるのは人の心
 一四(脳後)うしろ
 一四(遼天)遠い天
 一四(鷗子)たか
 一四(瀝瀝)したたる
 一四(滂沱)大雨のさま
 一四(袞袞)風が下から上にまき上げ吹くさま
 一四(八極)世界中を
 一四(漉漉)たらたら流れる
 一五(渾)すべての
 一五(側布す)おおう
 一五(透闌)晴れてひろびろとしている
 一五(架す)棚を作る
 一五(依稀)たり似ている
 一五(鶻)はやぶさ
 一五(看)を許さず見る以上のものである
 一五(無功の功)自慢しない
 一五(不賞の賞)手柄によるのではない賞
 一五(慶快す)気持よくする
 一五(煨髮)剃髪の髪を焼く
 一五(腥臊)なまぐさくけがらわしい
 一五(蓬煇)乱盛
 一五(鏖死)みな殺しにする
 一五(面彩一賽)二つが似たもの
 一五(未だ然らず)そこまでいっていない
 一五(鳧)かも
 一五(岩桂)木犀
 一五(吾れ爾に……)すっかり教えてしまった
 一五(賊を捉うるには……)芯をとらえるということ、賊は盗んだもの

衆寮を建つる上堂。喝一喝、大地平沈黄金を側布す。虚空透闌、高く梅檀を架す、馬厩に依稀

たり、牛欄に彷彿たり。鶻眼鷹睛看ることを許さず。所以に無功の功を立て、不賞の賞を受く。

鉄漢痛く抜毛し、金剛齊しく合掌す。風吹き、雨打って、日頭嗽す。坐卧経行相い慶快す。咄。

煨髮上堂。活きながら群牛脳後の毛を剗す。風吹き日炙りて転た腥臊。狼籍堪えず天地に薰

ず。罪惡重りて業火を將って焼く。恁麼に見得せば、切に忌む死灰に舍利を尋ぬることを。臭

煙蓬煇として燄頭高し。

米船帰る上堂。船に底無く、米に粒無し。岳に積み、山に堆し、洪波直に入る。恁麼に帰り

来て自由を得たり。清涼門下尽く點頭す。且く道え、清涼箇の甚をか説かん。大功は賞せず、

千古の標榜。

璨禪客至る上堂。金剛宝剑紅炉に入る。煨出す、揚岐三脚の驢、到る処沙場鏖死して戦う。

髑髏交衮血模糊。

四月一日上堂。徑に糝する揚花白氈を鋪く。池に点ずる荷葉青錢を畳む。面彩一賽其れ或は

未だ然らず。竹根の稚子人の見る無し。沙上の鳧雛母に傍うて眠る。

上堂。秋風涼しく岩桂香し。未帰の客故郷を思う。吾れ爾に隠すこと無し。賊を捉うるには、

須らく賊を捉うべし。会すや、舞蝶遊蜂短牆を過ぐ。

建康清涼語録 終

台州瑞岩禪寺語錄

侍者 妙宗 編

- (三〇) 輓峰(瑞岩寺のこと)
(三一) 炉轡(ふいご)
(三二) 倒退(あとしがり、進退がそろ
うところ)
(三三) 大地を平沈して……境地、境
界を表わす
(三四) 機先に坐断して……(このよう
であるから)
(三五) 須弥燈主……(このようになる
二六) 黒漆桶を打破(境界がひらける
一七) 豁々(ひろびろ)
(一八) 掣電の千機……(今まで現われ
なかつた働きが発る)
(一九) 東行は……(収める方
二〇) 西班は……(放つ方
二一) 来由を絶し(対立を絶し
二二) 縦横今古を透る(知事の働き
二三) 正当恁麼(尽十方界、禅はこの
一事しかない)
(二四) 功勲を立せざる(無所得の
二五) 一箭雙関を透つて(修行の道の
二つの関門を通過して)
(二六) 斬つて三段と為さん(切々たる
老婆心のため、門下をこのように
育てる)
(二七) 曷(日)射し
(二八) 運(めぐ)る
(二九) 向上の事(生命活動それ自体
三〇) 親授記(正伝の仏法
三一) 爛泥団……(泥団をぶつけられ
刺を踏む思いをする、門人の鍊
え方を表わしている)
(三二) 作家を見る(ひどい目にあって
はじめて師がわかる)
(三三) 画楼沽酒の処(休みに行くところ
三四) 相い邀え来つて……(きびしい
修行の後にはじめてこのような
境界がある)

山門を指して、曾つて歩を動ぜずして天台に上る。金鎖玄関尽く豁開す。坐断す輓峰の第一句、万機俱に透つて風雷を起こす。

方丈に踞つて、飢来れば喫飯し、困来れば打眠す。炉鞴天に亘る、鉗鎚を透る底有ること莫

しや。咄。倒退三千。

法座を指して、大地を平沈して高く虚空に出づ。機先に坐断して遊戲神通。須弥燈主下風に

立つ。
索話提綱
写者遺落

知事を謝する上堂。黒漆桶を打破して十方空豁豁。爆雷の一喝変通し、掣電の千機頓に発す。

便ち以つて東行は門庭を撐架し、西班は仏祖を怒罵す。収放来由を絶し、縦横今古を透る。正當恁麼且く道え、功勲を立せざる一句如何ん。大家頭に灰土を添う。

上堂。韓信浮橋を造り、李広布袋に入る。一箭雙関を透つて乾坤罣碍無し。瑞岩門下還つて此の人有りや。設し有らば、斬つて三段と為さん。何が故ぞ。老婆心切のためなり。

冬至上堂。曷運推し移る。円相を打して云く。看よ日南にして長く至る。眼睛裡に光を放ち、鼻孔裡に氣を出だす。還つて向上の事を知るや。飯に飽きて快活厨一堆、瞿曇の親授記を超過す。

上堂。鯨龍の頭角を斬り、虎豹の爪牙を截る。爛泥団受用不尽。刺を踏著して方に作家を見る。其れ或は未だ然らずんば、誰か画楼沽酒の処に在つて、相い邀えて来つて趙州の茶を喫せん。

上堂。今朝九月初一、板を打して普請して坐禅す。第一切に忌む瞎睡することを。直下猛烈

一九五(劈脊に棒し……)懸命の坐禪の様子

一九六(虚空消殞して……)都無所得のところ

一九七(朕)さざし朕兆

一九八(栗棘金圈……)証上の境界

一九九(烏鷄)からす

二〇〇(鵠)こうのとり

二〇一(鷺鷥)うのとり

二〇二(啾啾)鳥の鳴く声

二〇三(啓祚)さいわいをひらく

二〇四(梅は……)万物新なるものの代表

二〇五(眼中の塵)都無のところが真実であるから一枝を塵と言った

二〇六(銷断す煙雲千万重)世の中からはなれている

を先と為す。忽然として漆桶を爆破せば、豁たること雲の秋天に散ずるが如くならん。劈脊に棒し、迸胸に挙す。昼夜方に纔も眠るべからず。虚空消殞して更に消殞す。透過す威音未朕の前。咦。栗棘金圈恣に交袞す。凱歌高く賀して風顛に徹す。

上堂。夜半烏鷄鵠卵を抱く。天明に生出す箇の老鸛。毛長く嘴短し。鷺鷥の形飛起すれば一天の星斗乱る。古人恁麼に道う。只今衆中眼に明らめ、心に悟る底有ること莫しや。出で来つて古人と相見せよ。其或は未だ然らずんば、一拳に挙倒す黄鶴楼。一踢に踢翻す鸚鵡洲。咄。籬辺の燕雀空しく啾啾。

歲旦上堂。元正啓祚万物咸く新たなり。伏して惟みれば大衆梅は早春に開く。還つて見るや。扨子を挙して云く。一枝拈起す眼中の塵。

退院浄慈に赴く上堂。半年飯を喫して鞞峰に坐す。銷断す煙雲千万重。忽地一声霹靂を轟かす。帝郷の春色杏花紅なり。

瑞岩語録 終

臨安府淨慈禪寺語錄

參學 唯敬 編

三〇七(牛欄馬廐)謙遜してこのように
言う

三〇八(黃勅)勅語を書いた黄色い紙

三〇九(烜燂)あきらかに輝く

三二〇(千差)差別の迷いの世界

三二一(一著)境界

三二二(那邊に……)亀毛兎角は無い物
を有ると見る物、放下した一面は
何もないそれが展開したところに
妙有がある

三二三(敲開)たたいて開ける

三二四(鉄鎚隊に混じて……)厳しい修
行の様子

三二五(象無し)無影像

三二六(来端有り)象無の上で有る

三二七(理事相応)さとりのところ

三二八(一言相い契えば……)絶対のと
ころ

三二九(柳眼新条を発し……)万古移ら
ざる基礎の上で

三三〇(機先……)知事をはめることは
機先は境界内容、英霊の漢は立派
な人の意

三三一(驚然)まっしぐら

三三二(跽跳して)現実を跳びこえて

三三三(乾坤一色を)天地自然を

三三四(撞墻撞壁)生けん命修行すること

山門を指して、淨慈門下牛欄馬廐。一拶に透関して宇宙を豁開す。咦。切に忌む風を追い影を捕うることを。

法座の前に至って焚香、恩を謝し、勅黄を捧げて云く。黄金殿上一転語、烜燂たる紅輪万方を照らす。草木叢林正覺を生じ、磚頭瓦礫毫光を放つ。黄勅を挙して云く、看よ恩大にして酬い難し。

衣を欽め座に就いて乃ち云く。千差を截断して一著を单提す。那邊に亀毛を放下し、者

裡に兎角を拈起す。咦。歡喜の妙楼閣を敲開すれば、瑞靄祥雲碧落に充つ。転じて梅花に入つて爛熳として看ゆ。春風撼動す玉欄干。所以に人天普会し、仏祖透関す。大機を発し大用を顕す。鉄鎚隊に混じて骨毛寒し。正当恁麼、衲僧の鼻孔切に忌む相い瞞ずることを。畢竟如何ん。四海五湖皇化の裏、太平象無し来端有り。

復た挙す。僧趙州に問う。如何んが是れ大道。州云く、大道長安に透る。今則ち大家者裡に到る。大衆、且く道え、理事相応して甚麼の語をか著得せん。還って委悉すや。四五千条花柳の巷、二三万座管絃の楼。

新旧知事を謝する上堂。一言相い契えば万古移らず。柳眼新条を発し、梅花旧枝に満つ。扨子を挙して云く。総に者裡に在り、看よ看よ、機先箇箇英霊の漢。

上堂。今朝二月初一。扨子の眼睛凸出す。明なることは鏡に似て、黒きことは漆の如し。驀然として跽跳して、乾坤一色を吞却す。衲僧門下猶お是れ撞墻撞壁。畢竟如何、情を尽して拈

三四(一任)生死を生死に任せる

三五(霖霪)長雨

三六(葛藤々々)今云ったこれらも、
没從跡のところから見れば葛藤
である

三七(曾)曾って生ぜず……根本の境地
三八(洞裡の桃花……)不生不死の上
で

三九(一盞の清茶……)瞞ぜられない
境地

四〇(三更)十二時

四一(秧)稲の葉

四二(杲日)あきらかな日ざし

四三(三世の諸仏……)端午の節句の
鬼になぞらえている

四四(蹠跳す)極致を云う表現

四五(落草す)何かいうこと、方便

四六(啼を止むることは……)衆生のた
めにはいらないことも言う

四七(烏龜)めくらの龜

四八(瓮裡の天)かめの中から見た天
四九(兩段同じからず)諸方と淨慈との
差異

五〇(黑漫漫)何もないうところ

却して笑い呵呵、春風に一任して奈何んともする没し。

上堂。霖霪^{三三}たる大雨、豁達たる大晴。蝦蟇啼き、蚯蚓鳴く。古仏曾って過去せず、金剛の眼
睛を發揮す。咄。葛藤^{三六}葛藤。

二月十五上堂。曾^{三七}って生ぜず曾^{三七}って死せず。洞裡^{三八}の桃花紅にして水を照らす。憐む可し眼開
きて渠に瞞^{三九}ぜ被るることを。人間天上風波起る。還^{三九}って瞞^{三九}ぜ被れざる底有りや。一盞^{三九}の清茶一
瓣の香、分明に天曉三更^{四〇}を打す。

四月一日晴を祈る上堂。簷^{四一}声断えず前旬の雨、電影還^{四一}って連なる後夜の雷。麦は水の侵さん
ことを怕^{四二}れ、秧^{四二}は冷を怕^{四二}る。蚕桑猶^{四二}お要す暖来^{四二}って催^{四二}すことを。正当恁麼、衆生苦に没在^{四二}す。
蒼天^{四三}良に哀む可し。且く道え、如何なるかはれ仏法靈驗の一句。咄。杲^{四三}日空に當^{四三}って慧眼開く。
四月八日上堂。無憂樹下嬰孩を浴す。清曉薔薇露を帶て開く。衲僧相見の処を転過して後槽
の驢馬胞胎を出ず。其れ或は未だ然らずんば、同じく大仏殿に詣^{四四}して修法灌沐せよ。

端午上堂。三世^{四三}の諸仏を將^{四三}って頭と為し、六代の祖師を以^{四三}って体と為す。天下の衲僧を手と
為し、脚と為す。扠子を以^{四三}って円相を打して云く、看よ一道の神符を画き作して、鬼門上に向
つて貼^{四三}ずることを。且く道え、如何ん。赤口白舌尽く消除して、蹠^{四四}跳^{四四}す楊岐三脚の驢。

中夏上堂。結夏已に過し了^{四五}って解夏猶^{四五}お未だ来らず。中間の一句子、蓮花水を照らして開く。
甚に因^{四五}つてか落草^{四五}す、啼^{四六}を止むることは元と只嬰孩の為なり。

解夏上堂。四月十五日結夏、老鼠飯^{四七}瓮に入る。七月十五日解夏、烏龜^{四七}竹竿に上る。諸方は恁
麼なり、淨慈は然らず。身を翻して透出^{四八}す竿頭の路、眼を開きて掀翻^{四八}す瓮裡^{四八}の天。咄。兩段^{四九}同
じからず寐語^{四九}することを休めよ。機先鷄^{四九}子驢^{四九}年を隔^{四九}つ。

中秋上堂。雲漫漫、雨漫漫。中秋此夜に当たる。漫漫、黑漫漫^{五〇}。衲僧有ること莫^{五〇}しや。箇般

二四(聖人曾って滅度せず……)第一義諦のところに立つてこのような表現で表わされる宗教のエトワス
二五(一句機先絶対の立場に立つての一句)

二六(至人化を垂れて……)利他行のみ第一義

二七(閻浮に示現して……)去來の相を表わす、第二義

二八(黄金宝殿……)上の正覚の説明
二九(錦鱗を得たり)宗教体験の歡喜をこれで表わしている

三〇(人を驗尽す)歴尽してのち、人の採点もすることが出来る
三一(万像森羅……)万事が円満に運んでいる

三二(功何れの処にか……)功の帰するところが報恩
三三(恩を知って……)命を育ててくれたものに行持報恩する

三四(簾)竹の皮
三五(点眼)魂を入れる

三六(痛念す)先師をなつかしむ

三七(大家)師匠

三八(滅尽)綱宗を境として行じ、そのものになった時、それが消える

三九(大智大機)智が根本、機はその上の働き

真の境界、贏得たり欄干に倚ることを。

徽宗皇帝忌上堂。風颯颯、雨霖霖。聖人曾って滅度せず。清浄の妙音を演出す。若し耳を將って聴かば終に会し難し。一句機先古今に透る。

上堂。至人化を垂れて生死無し。閻浮に示現して去來有り。刹刹塵塵正覺を成ず。黄金の宝殿玉樓の台。

郷を出でて歸る上堂。釣を把って歸り來って錦鱗を得たり。天に充ち地を塞いで笑ひ忻忻たり。然りと雖も也た只尋常の事、風波を歴尽して人を驗尽す。

維那を謝する上堂。清浄法身盧舍那、衲僧隊裡乾蘿葡。逐日に呼び來って打すこと一槌す。万像森羅轉轆轤。且く道え、功何れの処にか歸す。恩を知って此れを以って深恩を報ず。大家

贏し得たり齋粥を喰うことを。咄。

上堂。緑竹半ば簾を含む。序品第一。新梢才に牆を出ず。正宗第二。雨洗って娟娟として淨く、風吹くに細細として香し。流通第三。淨慈詩を借りて教を説く。衲僧の与に点眼せんことを要す。眼開らくる底有ること莫しや。咄。者裡に向って草窠を跳出せよ。其れ或は未だ然らずんば、華亭旧と言を能くする鴨有り、越国今字を写す鶩無し。

清禅師水菴の塔を歸る上堂。寿皇頂顙老冤魔。痛念す先師の旧草窠。聊か蒲団を借りて打坐を供にす。大家手を拍して山歌を唱う。正当恁麼、湖海光を觀て、人天交ごも慶ぶ。咦。綱宗を滅尽して正令を行ず。

大石鼓至る上堂。頂門の眼を擲瞎して、大人大見を具す。瓮裡の天を掀翻して大智大機を具す。大を以って小に入る。万化普く施す。且く道え、何を以ってか驗と為さん。寫は喬木に遷って新舌を調え、梅は清香を吐いて旧枝に発す。

三三(風袞して……)涅槃裡にあっての自由な動き

三三(釈迦弥勒……)釈迦弥勒は利他のためにつくす人であるから他の奴という

三五(人無しと)無いというのには有るということ

三六(雨打して……)反対を言っている

三六(金剛の眼)大いなる見識

三六(生死何ぞ……)生きていくのは当然のことである

三六(衲僧頂上……)これが人生である

三六(咫尺)すぐ近くにあること

三五(重午)五月五日の節句

三六(蒼蒼)おおおしている

三六(皇皇)広大である

三六(鐘馗)流行病を追う神

三六(赤口)鐘馗の口

三六(錯)つて流伝することを(夏安居を終って、行く先で説法する時の注意)

三三(寰区)天子の直轄地

三三(斯年の景運)時のめぐり

三三(臣僧)天子の臣としての僧

三七(古徳)趙州

三七(殿裡底大衆……)大衆への呼びかけ

上堂。涅槃堂裡の死功夫。風袞して葫蘆水上に浮ぶ。恁麼に参学の眼を点開すれば、釈迦弥勒

勒是れ他の奴。忽ち箇の漢有って出で来って、争でか似ん春眠曉を覚え、落花处处啼鳥を聞かんにはと道わば、又且く如何ん、禪牀を拍して云く、将に謂えり人無しと。

上堂。雨打して虚空乾剝剝、日明らかにして大地黒漫漫。箇中開き得たり金剛の眼、生死何ぞ嘗って異端有らん。須弥山大海水、衲僧頂上に波濤起る。

歲朝上堂。天一を得て以って清し、元正啓祚。地一を得て以って寧し、万物咸く新なり。且く道え、衲僧一を得て合に作麼生、太平有道を歌い、和氣笑って春を迎う。

元宵上堂。燈しび点点、月团团。遊人歌鼓して鬧中に看る。且く道え、如何なるか是れ具眼の一句、咫尺の鳳樓雉扇を開く。玉皇の仙伐紫雲の端。

重午上堂。天蒼蒼。地皇皇。還って知るや、鍾馗は元是れ鬼。咄。赤口併せて亡ず。且く道え如何ん。衲僧八面門戸無し。今古寥寥として白昼長し。

解夏上堂。禪和の布袋頭を解却すれば、虚空豁達風流を逞うす。去るも亦た得たり、住も亦た得たり。大用現前軌則無し。諸方は恁麼、淨慈は然らず。咦。機に當って切に忌む錯つて流伝することを。

伝することを。

中宮錢を賜って祝聖水陸会を建つる陞座。仏祖同根、寂然不動、乾坤徳を合す。感じて遂に通ず、十方三世之寰区、億万斯年之景運、巍巍乎として自ら化し、蕩蕩乎として無為なり、当今雨順い、風祥し、時清めり、道泰かなり、所以に三軍歌笑し、万姓歡呼す。乃至草木昆虫、塵沙瓦礫、尽く正慧を開き、皆悉く朝宗す。且く道え、林下の臣僧如何んが拳唱せん。還って相い委悉するや。長く日月を將って天眼と為す。須弥を指点して寿山と作す。

復挙す。記得す、僧古徳に問う。如何んが是れ仏。答えて云く。殿裡底大衆還って知るや、

^{二七六}大海汪洋……^{二七六}仏の説明
^{二七七}現在の説法……^{二七七}仏だけがわかっている
^{二七八}光明)礼拝の対象としての仏
^{二七九}激澗)水が溢れている
^{二八〇}空濛)暗い
^{二八一}鸞臺の鏡)鸞という鳥を鳴かせるために見せる鏡、人間に宗教的動きを起させることに喩えている
^{二八二}一首の詩)全宗教的生命をかけたもの
^{二八三}忽然として……)下化門を表わす
^{二八四}(一尺の水……)水にいろいろなことが括っていくのを、下化のために活躍することを喩える
^{二八五}老廬)六祖
^{二八六}銅汁鉄丸)粗末なもの
^{二八七}谷出)取り出す
^{二八八}醍醐酥酪)美味なもの
^{二八九}咽喉を塞断する一句)ぐうの音も出ないような一句
^{二九〇}(虚空を爛煮……)虚空を煮た、麴のないうとん不思議を表わす

^{二七六}大海汪洋、^{二七六}須弥突兀。^{二七七}現在の説法思議せず。^{二七八}稽首す^{二七九}光明最も奇特なり。

^{二八〇}中秋上堂。十五日已前、^{二八〇}湖光激澗として方に好し。十五日已後、^{二八〇}山色空濛として雨益ます奇なり。正当十五日、若し西湖を把つて西子に比せば、^{二八〇}淡粧濃抹総べて相い宣し。還つて祖師西来意有りや。中秋の月は^{二八〇}鸞臺の鏡に似たり。^{二八〇}贏得たり多才一首の詩。咄。

^{二八〇}上堂。連雨初めて晴る九月一。円相を打して云く。日頭旧に依つて東辺より出ず。五蘊皆空なりと照見すれば、^{二八〇}衲僧参学の事畢りぬ。^{二八〇}忽然として雨又落つる時如何。一尺の水一丈の波、^{二八〇}謝郎船上山歌を唱う。

^{二八〇}典座に謝する上堂。^{二八〇}老廬の頂顙を坐断して無柄の木杓を拈起す。^{二八〇}忽然として銅汁鉄丸を^{二八〇}舀出し、^{二八〇}忽然として醍醐酥酪を^{二八〇}舀出す。^{二八〇}仏祖の大機測度し難し。猶お是れ家常の茶飯、且く道え、^{二八〇}咽喉を塞断する一句又作麼生。^{二八〇}虚空を爛煮す、^{二八〇}無麴の罽毘。

浄慈語録 終

明州天童景德寺語録 卷下

侍者 祖 日 編

一(自己を豁開す)自己のおのずから自己にてある如くなる

二(乾坤を透る)天地一貫、自己豁開の境地

三(表裡なし)相對するものが無い

四(然りといえども)相對するものがないその上に立つて

五(万古清風……)始めのわからない時間からの清浄な風が吹いてくる

六(玲瓏)すきとおっている

七(黄金の妙相……)仏の妙相は驢馬嘴と同じ

八(咦)宗教的咆吼全体的なことを現わすことば

九(壁を隔てて……)自分はそのようでない、直接である

二(尽大地の人)人間は誰でも

二(釣らざるに……)仏法の根本は不釣自上

三(恩を謝す)任命された恩を謝す

三(有問有答)法座を中心としての学道、宗教活動のようす

四(是れに於いて……)宗教生活の希望に満ちたようす

五(直に得たり……)第一義諦のところ、万法ともに吾に非ざる時節對を絶する境がひらける

一六、一七(相見せん……、相見已に了る)同時で異時、現在から現在へ流れる、人格的には自己から自己へ流れる

一八(汗馬)千里を一瞬に走る

一九(蓋代の功)積功累徳

二〇(知恩報恩)行持報恩

二一(動著)あちこち向く

二二(浄慈の鉢盂を……)日用の生活のうちにあるものを指している

山門。天童の大解脱門、衲僧の自己を豁開す。乾坤を透って表裡無し。然りと雖も、万古清風八面より来たり。前楼後閣玲瓏として起こる。

仏殿。黄金の妙相、驢馬嘴。咦。賊は是れ小人、智君子に過ぎたり。

方丈。横一丈、豎一丈。文殊、維摩壁を隔てて痒きを抓く。拄杖を卓して云く。尽大地の人釣らざるに自から上る。

法座の前に至り、香を焚き、恩を謝し、勅黄を捧げて衆に示して云く。雲九天に開く。呈起して云く。看よ彩鳳啄んで出ず。且く道え。如何んが委悉せん。急急如律令の勅。

法座を指して、炉炭を牀と為し、鑊湯を座と為し。口に黒煙を吐く。弥天の罪過。

衣を歛め座に就きて乃ち云く。有問有答屎尿狼藉。無門無答、雷霆霹靂。是れに於いて眉毛

慶快し、鼻孔軒昂す。直に得たり、大地平沈し、虚空迸裂すること。正当恁麼、且らく宏智

古仏と相見せん。仏子を拳して云く。相見已に了る。何事をか談ずべき。従前の汗馬人の識る

無し。只要す重ねて蓋代の功を論ぜんことを。然りと雖も知恩報恩の一句如何ん。四海浪平か

にして龍の睡り穩かに、九天雲浄うして鶴空を摩す。

復た拳す。記得す。僧百丈に問う。「如何なるか是れ奇特の事。」百丈云く。「独坐大雄峰。」

大衆動著することを得ざれ、且く者の漢を坐殺せしめよ。忽ち人有って浄土座に、如何なるか

是れ奇特の事と問わば、只他に向つて道わん。甚んの奇特か有らん。畢竟如何ん。浄慈の鉢盂

を天童に移過して飯を喫す。

三(外……内……)世間の対立
 四(痛く一槌を下す)二面裂破
 五(万事了畢す)真の境界に至る
 以上の三は、まよいの自己からさ
 とりの自己への経過を現わす
 六(道旧旧友 三(一劍当鋒)かちつ
 と尖鋒相いさそう
 七(放火殺人)自己の内心に放火殺人
 す、宗教的生命の動きを指す
 八(老胡 釈迦
 九(頂顛龍虎に跨る)偉風堂々のさま
 十(心念紛飛)雑念妄想の起るさま
 十一(無有無の無
 十二(無透脱の無
 十三(掃うことを得ざる処)自己、掃除
 をしにくい
 十四(忽然として……)心念紛飛を無に
 し、対を絶する。対を絶した自分
 を、客観的に虚空と云った
 十五(万別千差)諸法の妙有
 十六(柴頭火種……)如来藏思想
 十七(天童直截超宗の処)宗乗の根本を
 示す
 十八(炉と柴頭と……)二の対立がない
 十九(恁麻却って……)万法我にあらざ
 るところ、豊饒より超出のところ
 二十(工夫)辨道、炉は工夫のための炉
 二十一(雷霆烈焰)生命の火焰が燃えてい
 る坐禅
 二十二(無間地獄を開きて……)両班の動
 きを指す
 二十三(耐なり)耐えがたい、おかしく
 て耐えがたいという意に用う
 二十四(鉄臭の老拳頭)鍛えられた師家
 二十五(打殺す……)天下の修行者を打殺
 して断患せしめ、真空の中に生か
 す生命の動きを示す
 二十六(箇の卵を生ず)宗教生命の顕現、
 証理
 二十七(晒眼(さらす)
 二十八(春風……)天童の境地、人生のさ
 まざまな面、相對の根本に、清く
 澄み切つてすき透つたきらりと光
 るものがある。仏心の動き

上堂。外放入せず。内放出せず。痛く一槌を下して万事了畢す。且く道え、如何んが大白峰
 前の令斬新。内外の紀綱俱に委悉す。

道旧至る上堂。寃に頭有り、債に主有り。一劍当鋒門戸を豁開す。隊を拽き、群を成して恁
 麼に來たる。火を放ち人を殺して相い合聚す。且く道え、如何んが老胡の頂顛龍虎に跨る。

上堂。心念紛飛、如何んが手を措かん。趙州の狗子仏性無、只だ箇の無の字、鉄掃帚掃処紛
 飛多し。紛飛多き処に掃う。転た掃えば転た多し。掃うことを得ざる処、命を捨てて掃う。昼
 夜脊梁を豎起して勇猛にして切に放倒すること莫かれ。忽然として太虚空を掃破すれば、万別
 千差尽く豁通す。

開炉上堂。只だ箇の柴頭火種を煨火す。諸方聿に起つて競つて炉を開く。天童直截に超宗の
 処、炉と柴頭と底を尽して無し。恁麼却つて煖氣有り。正に好し、猛に工夫を做すに。且く道
 え如何ん。驀忽に雷霆烈焰を轟かす。從教れ、深夜雪の糢糊たることを。

新旧両班を謝す上堂。無間地獄を開きて閻羅大王現す。夜叉一部を聚めて牛頭両行を列す。
 其の進む者に与すれば、劍樹の上猛火に進用す。其の退く者に与すれば、刀山裡寒氷に退藏す。
 且く道え、甚事をか理会せん。耐なり、飯に飽いて箸を弄して判断す。尿急にして床に尿す。
 其れ或は未だ然らずんば、花柳春風戲場に入る。

上堂。天童の鉄臭の老拳頭、打殺す江湖の水牯牛、夜深うして忽然として箇の卵を生じ、天
 明に推出す大日頭。且く道え如何ん。諸人蒸湿の処を晒眼して、行歩滑なること油の如くなら
 しむることを免る。

上堂。靈雲の見処桃花開く。天童が見処桃花落つ。桃花開くは春風催す。桃花落つるは春風
 惡む。靈雲をば且く置く。天童と相見する底有ること莫しや。春風桃花を惡んで浪に躍つて頭

吾(寿慶節)国母の祝誕
吾(貝典)貝多羅葉
吾(觀音の……)祝誕の意

角を生ず。

寿慶節上堂。至れる哉坤元仏国摩耶之瑞を誕す。大なるかな貝典仏桃王母之春を祝す。正当
恁麼且く道え、何を以ってか驗と為さん。觀音の瓔珞妙莊嚴、勢至の花鬘長自在。

結夏上堂。衲僧の布袋頭を結却して、天童拈じ来つて氣毬と作す。脚尖を躍出して仏無數。
叢林に付与して馬牛と作す。

知事首座の秉弘に齋するを謝する上堂。鉄酸臛、金剛圈、咽喉を塞断し、鼻孔を拽脱す。天
童の立地分有り、衲僧命を乞うに門無し。且く道え如何。瞿曇の与めに子孫と作るに堪えん。

新たに妙巖を起す慶讚陞座。推倒す多年老鼠の窠。平地を掃空して呵呵と笑う。空架従り起こ
して頭角を生ず。驢牛を蓋覆して多きを厭わず。今朝大縁を成就し、千古大事を發揮す。且く
道え如何ん。斫額することは他の門外の客に任せ、家に致することは我が箇中の人に還す。

吾(近離甚の処ぞ)どこから来たか
吾(多少の衆ぞ)どの位の衆か

吾(前三、後三三)無量無數

吾(省数足陌)八十をもつて陌とす、
たくさんあること

吾(杜撰)粗末

復た挙す。文殊無著に問う。「近離甚の処ぞ。」著云く。「南方。」殊云く。「南方の仏法如何ん
が住持す。」著云く。「末法の比丘少しく戒律を奉ず。」殊云く。「多少の衆ぞ。」著云く。「或は三百
或は五百。」師云く。「春風勾引す麟鴟の啼くを。」著文殊に問う。「此間の仏法如何んが住持す。」殊
云く。「凡聖同居し、龍蛇混雜す。」著云く。「多少の衆ぞ。」殊云く。「前三三、後三三。」師云く。「平
地の波瀾鉄船に釣す。」この両転語、諸方と眉毛厮結せんことを要す。更に両転語有り。諸方の
与めに点眼せんことを要す。或は三百、或は五百、銅錢鉄錢、省数足陌、前三三、後三三、蘿
蔔芋妳、浅貯満担、諸方忽然として眼開けば、決定して手を拍して大笑せん。箇の甚麼をか笑
わんや。巴人を笑わずんば、便ち杜撰を笑わん。然りと雖も笑者還つて稀なり。忽ち人有つて
天童に多少の衆ぞと問わば、但他に向つて道わん。新たに妙巖を起して第一を誇る。一斉都て
画図の中に在り。

天(監収)役職名

天(窈八)の布彩……八つ穴のある着物から手を出す、というのは、方便、手段を用いて仏法を説くことを現わす

天(須弥を……)仏法の大用を現わす概はますで量るとき上を平らにならす棒

天(螟蛉)青虫

天(螟蛉)青虫を七日で吾子とする虫

天(類我類我)自分に似よという

天(万里片雲……)類我底のものの内容

この段は師匠が弟子を育てるようすを述べている

天(金剛宝剣……)監収の法器であることをたとえて

天(天童が喝下……)天童の門下で働くようす

天(輓)輪がめぐる

天(知音)互いがよくわかること

天(金磴)石橋

天(依稀たり)よく似ている

監収を請する上堂。窈八の布彩を穿って大家隻手を出だす。須弥を横たえて概と為し、大海を量って斗と為す。所以に生殺前に在り、収放後に在り。功を帰して塞破す虚空の口。還って知るや天童敢えて相辜かず。甘んじて啼鶏吠狗と作る。

上堂。螟蛉之子殆れて螟蛉に逢う。之れを祝して類我類我と曰う。天童門下類我底のもの有ること莫しや。万里片雲を掛けず、天地一団の猛火。

監収を謝する上堂。金剛王宝剣、匣に在るときは風を望んで犯さずの威有り。天童が喝下より飛出して、変じて無孔の鉄鎚と作る。輓じて荒田乱草に入る。任教れ、日炙り風吹くことを。甚に因ってか此の如くなる。匙を拈じて筋を把る。知んぬ多少ぞ。是れ知音に不ずんば知り易からず。

橋を造るを謝する上堂。去るものは那边に去り、来たるものは者裡に来たる。中間絶壑断崖なり。且く道え如何んが相い接せん。扠子を以って彎橋の勢を作して云く。看よ金磴の閭に依稀たり。彩虹の彎に彷彿たり。人は橋上従り過ぐ。又作麼生。松蘿影裡天巧を開き、汗黒光中画看に入る。

上堂。眼に黄葉の落つるを見、耳に孤雁の鳴くを聞く。且く道え是れ什麼物ぞ。与麼に得たり靈なることを。咦。溪上の秋光分外に清し。

浙翁の遺書に至る上堂。八月十八、錢塘の潮、浙翁の声偈天に潑ねて高し。尽く四海をして潮を弄する手ならしむ。徹底淵を窮めて輓ずること一遭、重ねて揀択して勞を辞せず。龍門を透って鳳毛を継がんことを要す。忽然として収卷して源に還り去る。万古曹溪の風怒号す。

上堂。陸脩静、陶淵明、文殊、普賢、円相を打して云く。咦。一款に具呈す。且く道え誰に憑ってか批判せん。若し是れ孔夫子ならば、吾乎爾に隠すこと無し。

七(浙翁の遺書)この段、浙翁の遺書に現われる宗風を歌ったもの
七(揀択)えらびわけ
七(忽然として……)さとりの世界が現われる
七(万古曹溪の風怒号す)さとりの上での咆吼
七(陸脩静)金陵の道士
七(咦)宗教的究極の表現
七(一款)真心をもって喜んで
七(吾乎爾に……)孔子ならばこのように表現するであらう

五(箇)第一義諦を指すことは
六(箇)の漢第一義諦を明らめたもの
八(因)ことばでないことは自然に発
する声
八(様)様(牙)木の枝の角ばっている
さま

三(古今の大雪……)何もないところ
四(心肝)心の芯になるところ
五(猛劈一椎)ひじでひとおしする
六(捏怪)こねてつくりあげる

七(十方虚空尽く……)自分の中にあ
った色々のものが消える

八(天童は然らず)自分のことばでい
う

九(款)罪人が述べる口述書

十(同款的者)同罪の者

十一(雁驚破す……)美しい景色で、西
來の意を現わす

十二(玲瓏)宗教的境地内容の喻示、坐
禅の清くすき透った表現、玲瓏の
岩は法を現わす
十三(崔嵬)ごろごろしてけわしい
十四(天童が滞貨……)魔心が消える
十五(賊路……)魔を現わす

十六(葫蘆……)正伝の仏法の喻説、仏
から仏へ伝わる

開炉上堂。大衆と召して円相を打して云く。箇は是れ天童が火炉、近前すれば則ち焼殺し、退後すれば則ち凍殺す。忽ち箇の漢有り出で来つて、合に作麼生と道わば、因、火炉動ぜり。

上堂。天童仲冬の第一句。槎槎牙牙たり老梅樹。忽ち花を開く一花両花、三四五花、無数の花。清誇るべからず、香誇るべからず。散じて春容と作りて草木を吹く。衲僧箇箇頂門禿す。

鷲割に交恠す。狂風暴雨乃至大地に交袞して雪漫漫。老梅樹太だ端無し。寒凍摩挲の鼻孔酸し。

上堂。古今の大雪長安に満つ。天童売却す這の心肝。無神道の菩薩猛劈一椎。千手眼の大悲捏怪多端なり。還つて会すや。獅子兒に教う迷子の訳。老婆心切相い瞞ぜず。

上堂。世尊道く。一人真を発して源に帰せば、十方虚空悉皆消殞す。師拈じて云く。既にはれ世尊の所説。未だ免れず尽く奇特の商量を作すことを。天童は然らず。一人真を発して源に帰すれば、乞兒飯碗を打破す。

上堂。挙す。五祖の演和尚云く。人有り、虚空裡に向つて、祖師西來意の五箇の字を写し得ば、老僧大いに坐具を展べて他を拝せん。師拈じて云く。當時に天童若し見ば、只他に對して道わん。款は囚口より出ずと。今則ち同款的の者有ること莫しや。既に無し。依稀として斜に去つて、雁驚破す海門の秋。

上堂。霜風号んで肅殺し、霜葉堕ちて蕭颯たり。弘子を挙して云く。看よ、唯玲瓏の岩のみ有つて崔嵬として、望めば転た高し。所謂る天童が滞貨、今朝短販一遭す。価に酬ゆる底有ること莫しや。下座巡堂す。

仏成道の上堂。瞿曇臘月八、夜半に走つて山を出ず。賊路羊腸として曲れり。偷心虎背に斑なり。人天を鈍置する者の一番、天童恁麼に檢拳す。且く道え。諦当なりやまた無しや。落賺の児孫頭尽く禿す。葫蘆藤種、葫蘆を纏う。

六（拄杖を擲つて）内的充実のようす

退院上堂。進院住を得れば便ち住す。退院行かんと要すれば便ち行く。還つて相い委悉すや。箇の条烏の拄杖、怪しむこと莫れ、太だ生癡なることを。拄杖を擲つて下座す。

天童語録

終

補記

『如浄禅師語録』は、道元禅師（一一〇〇—一二五三）の師である天童如净（一一六三—一二二八）の語録である。この『如浄禅師語録』は、古来、難読難解のゆえか、これの解説は、これまで江戸時代の学僧、円山道白（一六三六—一七一五）が、延宝八年（一六八〇）に註と跋等を付して『如浄禅師語録』を、世に流布したのみであった。ほかには、面山瑞方（一六八三—一七六九）が、『天童浄禅師語録事略』を、明和四年（一七六七）に刊行したにとどまる。

この点におもいをいたされて、小川弘貫先生は、駒沢大学大学院の中国仏教特殊講義において、そのテキストとしてとりあげられ、一方、円山の『如浄禅師語録』を復刊して、その宣揚につとめられた。そして、円山のような、いわゆる訓詁註釈にも十分の配慮をめぐらしながら、眼光紙背に透徹した境地から、先生一流の読み下しと的確な頭註を施された。頭註は、文句の註釈というには、あまりにも簡に過ぎ、簡に過ぎるというには、あまりにも端的な提撕というべきであろう。先生の御講義の一節『訳註 如浄禅師語録』を通じて、ここに、正伝の仏法を唱導した道元禅師の源泉ともいえるべき中国宋代の禅将・天童如净の宗旨に直参する手がかりを与えられたことは、悲しみのなかの法幸であると言わねばならぬ。

なお、この御遺講は、駒沢大学大学院における受業生のひとり足達瑛光さんが、耳底に留まるところを筆記して、これを浄書のうえ、提供されたものである。また、先生は、はじめに下巻を講義して、つぎに上巻を講義されたが、時間の都合で、上巻の最後の部分は、講義していただくことができなかったのである。それゆえ、一部に欠落の箇所があることをお断りしておかねばならない。足達さんに感謝の意をあらわすとともに、本論を収載したいきさつを、あえて一言しておくゆえんである。(東)